

令和 3 年 6 月 18 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K01673

研究課題名(和文)2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた環境教育の推進に関する研究

研究課題名(英文)A Study on the Implementation of Environmental Education for the Tokyo Olympics and Paralympics

研究代表者

大津 克哉(Otsu, Katsuya)

東海大学・体育学部・准教授

研究者番号：70598094

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が公表している「持続可能性コンセプト」をみても、今日の持続可能性の概念は、環境負荷の最小化や自然との共生、環境意識の啓発など、これまでの環境の側面だけではなく、人権や労働環境への配慮、サプライチェーンの管理などまで意義が拡大していることが分かる。今後、オリンピックに注がれる世界の目はさらに厳しさを増していくだろう。将来にわたりオリンピックの大会自体を持続可能なものにしていくためには、世界に向けて健全な環境の必要性に対する認識を高め徹底するとともに、環境問題を含めた広範な社会問題に対する配慮や取り組みがより一層求められていくことに違いない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

環境保全是終わりのない活動と言われるほど、将来にわたって気を長く持ち、忍耐力、継続力の必要な活動ゆえに、その成果がどこまで実を結んでいるのかという点については依然捗々しい成果が得られているとは言えない。このような状況の中で、現実的な環境についての哲学的・倫理的考察は極めて重要かつ対応を迫れている。今後、スポーツの持続可能性のためには、環境問題を含めた広範な社会問題に対する配慮や取り組みがより一層求められるであろう。

研究成果の概要(英文)：Examining the sustainability concept announced by the Tokyo Organising Committee of the Olympic and Paralympic Games reveals that the concept of sustainability today goes beyond just environmental aspects, such as minimizing environmental costs, coexisting with nature, and spreading awareness about the environment; its meaning has expanded to considering human rights and work environments and supply chain management. The scrutiny of the world on the Olympics is sure to only become stricter in the future. To make the Olympic Games sustainable well into the future, it will without a doubt be necessary not only to raise worldwide awareness of the necessity of a healthy environment, but to also consider and launch initiatives to solve environmental issues that include social issues within their scope.

研究分野：スポーツ哲学、スポーツ教育学、オリンピック教育

キーワード：スポーツと環境 持続可能性 Tokyo 2020 オリンピック教育 オリンピズム SDGs

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1980年代に入り環境問題への関心が高まり、経済成長のみを重視するのではなく、「環境保全」と「経済発展」を両立させた新しい方式として「Sustainable Development (持続可能な開発)」が提案された。この持続可能な開発の概念に従って、国際連合を中心とした国際機関は、1992年にブラジル・リオデジャネイロで開かれた地球サミットにおいて、環境を破壊しない開発を行うことを原則とする「リオ宣言」とともに、地球規模の行動計画である「アジェンダ21」を採択した。しかしリオでのサミットから30年ほど経つものの、残念ながら目標達成どころか全体的には気候変動による地球温暖化や大気汚染、海洋汚染、オゾン層の破壊、酸性雨、広範な砂漠化、有害廃棄物の越境移動、生物多様性の減少や種の絶滅、乱伐、水不足にいたるまで、世界規模の環境問題は悪化の一途をたどっている。さらに天然資源はかつてない速さで消え去りつつあり、依然として環境問題の解決に向けて行動を起こす必要があるという社会的な合意形成がなされないまま持続不可能な行動によって汚染が生じ、地域の生態系だけでなく地球環境にとっても脅威となっているのが現状といえる。

そうした諸問題への対応として、近年、スポーツ競技団体をはじめ、スポーツ関連企業においてエコ活動の実践が見受けられるようになってきたものの、環境保全は終わりのない活動と言われるほど、将来にわたって気を長く持ち、忍耐力、継続力の必要な活動ゆえに、その成果がどこまで実を結んでいるのかという点については依然捗々しい成果が得られているとは言えない。

地球環境問題はスポーツ活動と密接に関係する。スポーツ活動のためのインフラ整備によって自然環境を壊してしまう恐れもあるし、また悪化した環境は、スポーツ実施者の健康を害するものにもなる。大気汚染、水質汚染、地球温暖化現象による異常気象やオゾン層の破壊による過度の紫外線、自然棲息地の消失、汚染物質、殺虫剤の残留、室内空気の質、そしてタバコの煙までもがアスリートやスポーツ愛好者の健康に影響を与える環境問題として挙げられる。

このように地球環境の悪化は、スポーツの存在自体に関わる重要な問題であるにもかかわらず、日本のスポーツ研究の分野において「スポーツと地球環境」の問題に関する研究がこれまでほとんど為されていないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に向けて、オリンピックの精神(オリンピズム)の3本柱に位置付けられている「環境」について「スポーツ」という立場から啓発推進のための資料を提供することを目的とする。こうした一連の環境保護や保全をはじめとした実践活動は、気候変動や地球環境問題といった人類の将来の生存と繁栄にとって差し迫ったグローバルな課題に対する関心をも高めることが期待される。

3. 研究の方法

環境問題を考察するにあたり、環境倫理の観点からのアプローチも加えられる。これは環境に関する教育内容の充実に関しての基礎的理論と成り得るものであり、学校教育だけにとどまらずスポーツ界で取り込まれる環境プログラムの構築に多くの示唆を与えるという点において意義を有する。

そこでユースオリンピック競技大会(YOG)や直近のオリンピック大会で展開された環境啓発活動に着目し、会場の視察を通して大会組織委員会が推進する環境対策についてその実際を把握する。さらに地球環境問題研究の一領域として位置づけられる環境倫理学に関する規範的論点

から、2021年に延期されたTokyo 2020大会に向けて、スポーツと環境の持続可能性を目指すための道筋について概観しようとするものである。

4. 研究成果

(1) 環境倫理学における指摘

近年、環境の持続可能性を考慮して実施されるスポーツ活動の在り方について提案がされてきている。これまで自然を人間にとって都合のよい状態に創り変えていくことに価値が置かれてきたように、経済成長のみを重視したインフラ投資が質より量の方に大きな強調が置かれた近代社会の発展によって環境破壊が誘発されたことにある。こうした状況について「環境倫理」の観点から概観すると、拡大や前進といったこれまでの価値観に異議が唱えられ、人間中心の価値観から脱却する必要性が求められてくる。

例えば、環境倫理の再考について牧野は、「哲学や倫理学の抽象的原理を環境問題に『適応』したり、『適用』するという発想ではなく、環境破壊の現実から学び、自然科学や社会科学とも共同する哲学や倫理学の研究でなければならず、環境の危機が深刻なだけに、それに対応できる現実的な環境倫理学を再構築することは急務である」と述べている。さらに、環境の社会的倫理の確立のために「重要なことは、社会問題としてとらえ、その社会的解決をはかることである。またそのような人間の社会的債務を明確にすることである」ともいう。

人々の地球環境問題への関心の高まりに呼応するように、環境についての哲学的、倫理的考察は極めて重要かつ、早急な対応を迫られている。なぜならば、環境倫理とは人間と自然との関係性について検討し、「環境」に関する人間社会の活動がどうあるべきかを問うものだからである。したがって、スポーツを取り巻く環境対策はどうあるべきかについても、環境倫理のなかで扱われるテーマになるはずである。

(2) オリンピックと環境問題

環境保全に対する国際的な潮流に呼応して、国際オリンピック委員会（IOC）は1990年代初頭から「スポーツ」、「文化」に続いて「環境」をオリンピズム（オリンピック精神）の3本柱とし、スポーツ競技団体の社会的責任として地球環境への最大限の配慮のもとでオリンピック競技大会を行うことを公表した。そして、翌年には、IOCの個別委員会のなかに「スポーツと環境委員会」を発足させ（2015年に「持続可能性とレガシー委員会」へと改組）、スポーツ界でも環境に対して取り組んでいく必要があると、独自に「オリンピックムーブメントアジェンダ21」を策定し、持続可能性に対する責任を明確化している。

例えば、オリンピック開会式のプログラム内容を概観しても、そこには環境破壊を阻止するための保護や保全をはじめ、平和への希求、さらに貧困層や社会的に疎外された人々の生活を改善することなど、「オリンピズム」という教育的理念が多局面に発信されている。

このように人類の生存と繁栄にとって差し迫ったグローバルな課題に関心を高められれば、開会式を通じた教育運動として、真のオリンピック精神を理解する契機となるだろう。この観点からすれば、オリンピック・ムーブメントの教育機能として開会式に着目することは重要な点であると考えられる。

(3) オリンピック関連大会における環境保護のための取り組み

まずYOGにおけるCulture and Education Program (CEP)の内実や、開会式に焦点を当て述べる(2018/ブエノスアイレス)。YOGが他の競技大会と異なる点は、競技と並行して参加選手への教育及び文化的な活動プログラムが含まれている点にある。IOCはその意図として、参加

選手には大会全期間中、選手村に滞在させ、多様なプログラムの体験を通じて世界各国・地域からの参加者らと国際親善や友好を深めるなかで、人間形成を促すことを狙いとしている。大会当初は環境について学べる機会が提供されていたものの、大会を重ねていくごとに、選手を対象にした教育プログラムの内容が、フェアプレーや八百長の防止、アンチドーピングに関する情報提供、さらにあらゆるハラスメントに焦点を当てたアスリートへの注意喚起、トレーナーから効率の良いトレーニングの方法やリカバリーについて、デジタルソーシャルメディアを最大限に活用して発信することを学習するメディアトレーニングの企画など、若手エリートアスリートへの技術的な支援に傾向している感は否めない。

特に若い世代へオリンピック教育の重要性を認識させ、継続した実践を重ねていくことがYOGに求められる役割である。今一度、「文化・教育プログラム」実施の意義を再考し、YOG大会組織委員会が実践的かつ戦略的な計画を立て、IOCもそれを支援することが「オリンピックの持続可能性」といった未来への展望をもたらす。すなわち、それらを推進していくことがクーベルタンの理想を出発点とした、「スポーツを文化と教育と融合する」というオリンピズムの指針を体現することに繋がるのではないだろうか^{iviii}。

次に、直近のオリンピック大会における環境への取り組みについて述べる（2016/リオデジャネイロ、2018/平昌）。

大会組織委員会による環境面の取り組みは、オリンピック大会の開催に向けて温室効果ガス排出量の削減や再生可能エネルギーの導入、持続可能な施設の建設、環境に配慮した輸送インフラの整備、生物多様性の保全、自然の復元など、その活動は多岐にわたる。なかでも、来場者が会場までの移動等により生じる二酸化炭素排出量を金額に換算し、自然再生エネルギーへの投資を促すカーボンオフセットの仕組みのように、参加者を巻き込む啓発活動はユニークな事例として挙げられる。今後も都市の再開発等に伴い、オリンピック大会が環境に悪影響を与えることなく、むしろ環境を整備、改善し、都市の緑地化といったような緑のレガシーを残し、さらに世界に向けて健全な環境の必要性に対する認識を高め、徹底することが、より一層求められる^{ivv}。

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が公表している持続可能性コンセプトをみても、今日の持続可能性の概念は環境負荷の最小化や自然との共生、環境意識の啓発など、これまでの環境の側面だけではなく、人権や労働環境への配慮、サプライチェーンの管理などまで意義が拡大していることが分かる^{vivii}。今後、オリンピックに注がれる世界の目はさらに厳しさを増していくだろう。将来にわたりオリンピックの大会自体を持続可能なものにしていくためには、世界に向けて健全な環境の必要性に対する認識を高め、徹底するとともに、環境問題を含めた広範な社会問題に対する配慮や取り組みがより一層求められていくことに違いない。

これまでYOGや直近のオリンピック大会での一連の環境対策を概観したが、長期的な展望を欠いたインフラ整備や景気浮揚策のみの短期志向の戦略展開といった一過性のものでなく、環境保全を考慮した節度ある開発によって「どのような長期的な遺産を遺せるのか」という視点を明確にしておく必要がある。もしも、持続可能性に配慮しない行為があれば大会の評価に大きな影響を及ぼすだけでなく、オリンピック・パラリンピックの価値を棄損することにもつながりかねない。

「地球環境」と「スポーツ」の関係において鍵となるものはやはり、「持続可能性」である。これからのスポーツ開発がどのようなものであれ、環境へのダメージを最小限（ミニマム・インパ

クト)にし、環境の認識が最優先されなければならない。さらに、現在の廃棄型から持続可能型のスポーツへの転換が必要である。しかし、未だスポーツ界は、「環境」を保つためにせめてミニマム・インパクトを心掛けるということにとどまっている。

今、私たちに問われているのは、「人類と地球」との関わり方である。「スポーツと環境の関係」にとどまらず、もはや「スポーツと環境の持続可能性」について問われている。まずは、自分たちが地球に与える広範な影響を意識しながら、自らの行動が環境をどのように左右しているのかを知ること、そしてそれら及ぼされている影響を未然に防げる行動を取ることが大切だ。早急にスポーツによる環境破壊と、環境によるスポーツ破壊を防ぐために各々が責任ある解決策を見出す必要がある。

今後、我が国でも「スポーツの振興」と「自然環境の保全」との調和を目指すための試みについて検討する際には、地球環境や自然環境が適切に保全され、将来の世代が必要とするものを損なうことなく、現在の世代のニーズを満たす「環境の持続可能性」という概念が経済や産業界からもますます注目されることになるだろう。まさに自然と人間との関わり方を再考する際には持続可能性が肝要であり、それは単に利潤の獲得のためばかりでなく、将来を見通すためのキー概念として重要な意味を有する。地球環境問題はグローバルであるが、その解決の糸口はローカルである。このように、スポーツを通じて様々な問題について取り組んでいくことは、スポーツの重要性を再認識させるだけでなく、スポーツ界だけの変革に止まらず、持続可能な社会を実現させることにも繋がっていく。さらに地球環境を守ることの大切さを発信する試みは、スポーツと環境の関わり方を改めて考える機会を得ることができ、スポーツや体育の研究分野においても重要な意義を持つものであると捉えることができる。

ⁱ 牧野広義・藤井政則・尼寺義弘：現代倫理の危機 -倫理学、スポーツ哲学、経済哲学からのアプローチ。文理閣，p35，2007。

ⁱⁱ 大津克哉．第2回 ユースオリンピック冬季競技大会(Lillehammer 2016)にみる“Learn & Share”の実践と課題 - 環境問題へのアプローチに着目して-．東海大学紀要体育学部第45号，東海大学出版会，2016，p.81-90。

ⁱⁱⁱ 大津克哉．第3回ユースオリンピック夏季競技大会(Buenos Aires 2018)にみる“Athlete Education Programme”の実践と課題 -Olympism in Action Forum から見える今後の展望-．東海大学紀要体育学部第48号，東海大学出版会，2019，p.97-109。

^{iv} 大津克哉．リオデジャネイロオリンピック開会式の文化プログラムにみる環境啓発活動とその展開．東海大学紀要体育学部第46号，東海大学出版会，2017，p.67-77。

^v 大津克哉．第23回オリンピック冬季競技大会(2018/平昌)の文化プログラムにみる環境啓発活動とその展開．東海大学紀要体育学部第48号，東海大学出版会，2019，p.21-31。

^{vi} 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会．東京2020×持続可能性(PDF) Retrieved from <https://gtimg.tokyo2020.org/image/upload/production/xnfwjwetfcuvybjkcjfs.pdf>

^{vii} 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会．持続可能性大会前報告書 持続可能性ハイライト(概要レポート)(PDF) Retrieved from <https://gtimg.tokyo2020.org/image/upload/production/hmdl1qgxh5nght13ge.pdf>

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 8件）

1 . 発表者名 Katsuya OTSU
2 . 発表標題 Governance in Sport and the Olympic Movement
3 . 学会等名 The 14th INTERNATIONAL SESSION FOR PRESIDENTS or DIRECTORS OF NATIONAL OLYMPIC ACADEMIES (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Katsuya OTSU
2 . 発表標題 Governance in Sport and the Olympic Movement Part
3 . 学会等名 International Convention of Sport and Physical Activity (AFIDE 2017) (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Katsuya OTSU
2 . 発表標題 Role of Sport in Solving Global Environmental Problems on the Way of Creating a Sustainable Society
3 . 学会等名 The International conference “Sustainability and Legacy in Sport: Challenges and Perspectives” . (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Katsuya OTSU
2 . 発表標題 What NOCs can do for the sustainability -JOC Environmental Policy-
3 . 学会等名 The 13th JOINT INTERNATIONAL SESSION FOR PRESIDENTS or DIRECTORS OF NATIONAL OLYMPIC ACADEMIES and OFFICIALS OF NATIONAL OLYMPIC COMMITTEES (国際学会)
4 . 発表年 2016年

1. 発表者名 Katsuya OTSU
2. 発表標題 Ecoflag Movement - A global drive by sports enthusiasts to secure a healthy ecosystem for all future generations -
3. 学会等名 SPORTS AND ENVIRONMENT SYMPOSIUM 2016 -Pre-Symposium (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Katsuya OTSU
2. 発表標題 The Role of Sport in Global Environmental Issues from International Perspectives - An Approach to Creating Sustainable Society -
3. 学会等名 SPORTS AND ENVIRONMENT SYMPOSIUM 2016 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Katsuya OTSU
2. 発表標題 DISCOVER TOMORROW -Tokyo2020
3. 学会等名 SPORTS AND ENVIRONMENT SYMPOSIUM 2016 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Katsuya OTSU
2. 発表標題 A Study on the Implementation of Environmental Education for the Tokyo Olympics and Paralympics - Focusing on Actively Implementing Solutions to Global Environmental Issues
3. 学会等名 The 2020 Yokohama Sport Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大津克哉 ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 pp.507-513.
3. 書名 保体304/保体305 現代高等保健体育改訂版教授用参考資料 改定版第1刷	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>【その他 文筆】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本オリンピック委員会スポーツ環境専門部会 大津克哉（編）：指導者用テキスト『スポーツと環境 -スポーツの心、環境と未来へ-』.平成29年度 JOCスポーツ環境専門部会活動報告書, pp.50-62, 2018 ・大津克哉：女子体育4.5月号Welcome to TOKYO オリパラに向けて オリンピック・ムーブメントの実験的な改革 ~ユースオリンピック競技大会から見えるIOCの展望~. (公社)日本女子体育連盟, pp.66-69, 2019 ・来田享子, 大津克哉, 三浦裕, 石塚創也：環境保護の視点からみるスポーツの持続可能性に関する調査研究 第1報. 公益財団法人 日本スポーツ協会 スポーツ医・科学委員会, pp.18-42, 2020 ・大津克哉：(なんでだろう?)バドのシャトル、「人工」になったの... 朝日新聞DIGITAL朝刊15面スポーツ, 2021 <p>【講演】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大津克哉「15周年記念JOA特別コロキウム『オリンピック 環境プログラムの現在』」特定非営利活動法人 日本オリンピック・アカデミー、2017年7月22日 ・大津克哉「SDGs ゴール13：気候変動に対してスポーツは何ができるの？ スポーツと環境」SDGsport、2017年7月29日 ・大津克哉「2017年度 オリンピック・パラリンピック伝道講座『環境プログラム：どのような課題が？』」首都大学東京、2017年 11月20日 ・大津克哉「スポーツと環境 スポーツの心、環境と未来へ」公益財団法人 日本野球連盟、2018年 1月13日 ・大津克哉「平成30年度 PTA研修会『オリンピックについて楽しく学ぼう -Tokyo2020大会にむけて-』」東京都世田谷区立赤堤小学校、2018年10月24日 ・大津克哉「第200回記念 JOA特別コロキウム『YOGの現在と課題』」特定非営利活動法人 日本オリンピック・アカデミー、2019年3月17日 ・大津克哉「気候変動への適応」愛知県豊田市環境政策課、2020年2月17日 ・大津克哉「スポーツ健康産業団体連合会 第25回シンポジウム」公益財団法人 スポーツ健康産業団体連合会、2020年11月24日 ・大津克哉「第16回 JOCスポーツと環境・地域セミナー」公益財団法人日本オリンピック委員会、2020年 12月 12日

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------